

令和4年度 学校評価（自己評価書・学校関係者評価書）

中期目標	重点努力目標（評価項目）		自己評価	総合評価	達成状況と成果	関係者評価	学校関係者の意見・要望	今後の改善方策 次年度への課題 （★学校関係者評価を受けて）
主体的・対話的な授業づくりをめざし、確かな学力を身につけるよう努める	魅力ある教育活動の推進	・ねらいを明確にし、見通しをもって学習に取り組み、振り返りで新たな課題を発見できる、学ぶ喜びを味わうことのできる授業づくりに努める。	B	B	・単元終了時の振り返りを繰り返す中で、理解したことがより明確になった。 ・授業の初めに、小テストを行う時間や既習の内容を復習する時間を設けているが、さらに漢字や計算の基礎基本を定着させる工夫が必要である。 ・効果的に ICT 機器を取り入れることによって、主体的に学習に臨もうとする児童が増えた。 ・個の学びを学級全体に還元していくことができるとよい。	B	・子どもたちが学習内容を理解しやすいように、学校全体で取り組んでいるところがすばらしい。また、ICT 機器の使用方法を子どもたちの実態に合わせ変えているところがよい。今後も、ICT を活用して、子どもの学びが深まるよう続けてほしいが、依存しすぎに気をつけたい。	・ICT 機器の活用については、子どもたちが依存しすぎないように、校内で使用方法について共通理解を行う。 ・単元終了後に、子どもたちが振り返りを書く中で、次の課題を見出し、時には学級全体で共有できるよう支援を続けていく。
		・基礎的・基本的内容の定着を図るとともに、問題解決的な学習・体験的な学習・ICT の活用を重視し、自ら考え、判断する場を意図的に設定するように心がける。	B					
温かい人間関係に支えられた学級集団づくりや体験活動にすんで取り組む態度を育成する	心の教育の充実	・あいさつのできる子どもを育成する。 ・たてわり活動や体験活動、道徳科の授業などを通して共感的人間関係を構築し、思いやりの心を育む。	B	B	・登校時や掃除の時間に教職員からもあいさつをしているが、コロナ禍での制限もあり、十分には子どもを育成できていない。 ・たてわり活動を通して、上級生が思いやりをもって下級生と接する経験を積むことができており、継続の必要性を強く感じている。 ・友達の良いところを伝え合ことで、友達のをさをすすんで見つけることができた。	A	・コロナ禍の中で、マスクをしているため、相手の表情や知り合いの人かなど、捉えにくくなった。今後、コロナに関わる対応の変化に合わせて、「あいさつをする大切さ」を粘り強く伝えていってほしい。	・今年度も行ったあいさつ運動を運営委員中心に今後も行い、「子どもたちがあいさつをする気持ちよさ」に気づけるよう支援していく。 ・一人一人のよさが伝わるよう、朝の会や学級活動の時間を使い、エンカウンターを実施し心の居場所づくりを行う。
		・学校生活のすべての場面で、自己肯定感を高めるとともに、自己有用感を高める。	B					
職員・児童の健康・安全意識の高揚を図り、危険予測・回避能力を育成する	危機管理意識の向上	・すべての教職員ですべての子どもを見まもり、いじめ・不登校・虐待・問題行動に対して、組織として早期発見に努め、未然に防ぐ学校・学級づくりに努める。	A	A	・保護者等から相談があった場合は全体で共有し、組織として対応することができた。また、生活サポート委員会で情報共有をし、問題行動の早期発見や対応ができていた。 ・交通安全教育等の事前指導では、効果的に資料を使うことができた。今後も継続していく。 ・資料の引用について学び、インターネットからの情報を正しく活用しようという意識づけをすることができた。	B	・いじめや不登校、問題行動に対して全職員で対応している姿は、とてもよい。しかし、子どもや保護者の評価と教職員の評価に若干のズレが生じている。今後、いじめや問題行動が起きた時の対応を全教職員で考え、子どもたちが「我慢する」ことがないよう取り組んでいただきたい。	・いじめ等の問題を発見したときは、情報共有をすぐにに行い、その都度対応しているが、今回のアンケート結果を真摯に受け止め、問題の解決が子どもや保護者に伝わるようチームで取り組んでいく。また、早期発見できるように、保護者との連携を密にし、生活サポート委員会での情報共有を積極的に行う。
		・交通安全教育・防災教育・効果的な避難訓練などの体験活動を通して、「自分のいのちは自分で守る」ことができる子どもを育成する。 ・情報モラル教育を推進し、社会において適正な活動を行えるよう、子どもの情報活用能力を高める。	A					
家庭・地域との連携を深め、地域社会の信頼と協働が得られるよう努める	小中連携教育の推進と地域教育力の活用	・専門性を生かした教科担任制を積極的に取り入れ、小中の学びの一貫性を図る。 ・学校と家庭・地域との連携・協力を密にし、地域に開かれた豊かな教育活動を展開することで、信頼される学校づくりを推進する。	A	B	・英語・理科・図工・体育・家庭科等教科担任制を取り入れたことで、子どもたちは、より専門的な授業を受けることができた。小中一貫性のねらいやメリットを全教職員がさらに研修する必要がある。 ・学校だよりや学年通信の発行・HP でのタイムリーな発信などをこころがけることで、地域に開かれた教育活動が展開できた。	A	・教科担任制を行っていることで、子どもたちの学習意欲の高まりを感じる。中学校に入学した子どもの保護者からも、子どもたちが教科担任制の授業をしっかり受け入れていると好評である。また、小中一貫教育の推進を継続していることで、中1ギャップの軽減にもつながっている。	・教科担任制を可能な限り継続し、中学校への移行をスムーズにする。 ・豊南小の特色である環境教育を柱とした体験活動を、今後も充実させていく。 ・タイムリーな情報を、学校だよりや HP などを使い、発信していく。
		・学校経営や運営の充実を図るため、学校評議員制度や評価システムを活用する。	B					
タイムマネジメント力の向上および子どもにも向き合う時間の確保を意識した教師集団をめざす	働き方改革と教職員の力量向上	・「チーム豊南」の協働体制をすすめ、教職員の負担を軽減しつつ、子どもに向き合う時間の確保に努める。	A	A	・協働では、さまざまな校務分掌の仕事は教職員全員で一年間を見通して協力して行えた。そのため、児童が安全に活動できたり、児童と向き合うことのできる時間が増えたりしている。 ・経験年数の浅い教職員でも、遠慮せずに意見を言うことができる温かい職場だと感じている教職員が多い。	A	・教職員みんなが信頼し合い、子ども達のために協力して行っている姿はとてもすばらしい。 ・タイムマネジメントについては、今後の課題である。	・これからも、月に1回の「協働」を行うことで、個々の負担軽減を行っていく。 ・在校時間調査を行っているため、タイムマネジメントに対して一人一人の意識は、上がってきている。月に1回の「個人裁量日」の設定を継続していく。
		・何でも言い合える温かい職場づくりに努めるとともに、行事の持ち方の工夫や会議の効率化、個々のタイムマネジメントへの意識の向上を図る。	A					

【自己評価 A：十分に達成されている B：概ね達成されている C：あまり達成されていない D：ほとんど達成されていない】

【総合評価 自己評価をもとに 上記のA・B・C・D で評価】

【関係者評価 A：適切である B：概ね適切である C：あまり適切ではない D：適切とは言えない】